

# 『子規居士真筆俳句歌留多帖』考

復 本 一 郎

## 一、『子規居士真筆俳句歌留多帖』という本

大正六年（一九一七）十二月二十日印刷、二十五日に発行された本に『子規居士真筆俳句歌留多帖』（絵事堂）なるものがある。縦十六・九センチ、横十センチの変型判。和装。袋綴じ、本文四十九丁、全五十二丁（序文以外は、丁付、ページ付けなし）。表紙、はなだいろ縹色。左側に貼題簽、文字は河東碧梧桐。口絵写真、三頁。ページ一頁は、子規画の千代紙細工の人形の絵（明治三十五年八月二十二日製作のもの。平成十三年九月刊、松山市立子規記念博物館編『正岡子規の絵』参照）、もう一頁は、軸装の新出碧梧桐句（梢の花日全く暮るゝ梅）（従来知られている句形は、蝸牛社刊、栗田靖編『碧梧桐全句集』所収の大正五年作（梢の花日全くかける梅）、そしてさらにもう一頁は、内藤鳴雪の〈文珠語り舍利弗眠る日永かな〉（明治四十二年一月俳書堂刊、『鳴雪句集』所収）と高浜虚子の〈蘭の花の上漕ぐ舟やかすか也〉（『高浜虚子全集』未集録作品）の句の短冊の写真である。

奥付に年月日を印で押し、そこに「大正七年十一月十

一日」と墨書されている。あるいは、何らかの事情があつて、約一年程発行が延引したのかもしれない。奥付の「編輯兼発行者」欄には河井長蔵の名前が見えるが、本書の実質的な編者は、「序」文の内容よりして、河東碧梧桐に間違いないと思われる。この「序」文、碧梧桐の文章として、従来、ほとんど注目されることがなかったように思われるので、やや長文であるが、左に省略せずに引用、紹介してみることとする（『碧梧桐全句集』所収、栗田靖編「河東碧梧桐年譜」にも、この「序」についての記載はない）。

## 序

百人一首に因んで、俳句の歌留多を作つて見てはどうか、といふやうな話は、毎年正月札に行く子規庵での話題であつた。当時「俳句分類」とか「俳家全集」とか「一家二十句」とか言つて、古句蒐輯の事業が緒につきかけてゐた時であつたから、其中から一百人を選んで、其の人々の特色とも見える代表

的一句を選ずるといふことは、居士にとつて煩はしいことではあつたが、又た多少興味のあることでもあつた。自分等が最初に見本を作つて見てもいゝな

ど、言つてをつた中に、もうこんなものをこしらへて見た、と言つて、我等の前にひろげられたのが、この俳句歌留多であつた。居士自筆の句が、母堂や令妹の手になつた、裏に葉袋紙を貼つた歌留多の上に書いてあつた。それに、それを読んでる本も出来てゐたやうに記憶する。丁度明治二十七八年頃のこと、居士はまだ全く病魔の人でなかつた。

案外興のないものだ、と始めてそれを四五人でつた時に居士は言つた。が、それは興の乗るまでに有頂天にならなかつたせいもある。居士が余り乗気にならなかつたので、其後もこの歌留多をひろげたことは甚だ稀れであつた。恐らく明治卅五年私が根岸に引越した時、鳴雪、四方太、虚子、紅緑、鼠骨などゝいふ人達が会して、居士令妹なども加はられ、即興的のこの歌留多をとつたのが、其最終であつたらうと思ふ。既に年久しく仕舞つてあつたため、さまで手摺れもしてゐないのが、今では却て好紀念となつた。

元来百枚揃つてゐたのであるが、今三枚の行方が不明である。之を呈するも蛇足であるから、九十七

枚の端数のまゝにして置いた。

元来遊戲の爲めた依つたものではあるが、これによつて居士の古人及古句に対する鑑賞の一端を知る事が出来る。百人一首のやうに普遍な性質を持つてゐるかどうかは疑問であつてもそれとは別な、むづかしく言へば芸術味を持つてゐることはたしかである。

正月の遊戲といふことも万更無意味な事ではないとすればこの歌留多が津々浦々にまで行き渡つて百人一首のやうに普遍性を持つものとならん事を希望して已まない。

大正六月十月

碧梧桐識

「序」というよりも、正岡子規撰「俳句歌留多」の解題と言つたほうがよいような内容である。「俳句歌留多」成立のいきさつが明らかにされている。

「俳句歌留多」のことが話題となつたのは、子規庵に年始に集まつた門人達の間においてであつたという。そして、その時期は、子規が「俳句分類」や「俳家全集」や「一家二十句」の編纂に取り掛かつていた頃であると記されている。まず「俳句分類」であるが、「形式的并実質的」分類である丙号に着手したのが明治二十四年（一九一）の冬であるので、甲号、乙号への着手は、それ以

前であろう。明治三十年（一八九七）十二月三十日発行の「ほととぎす」十二号に掲載の短文「俳句分類」の冒頭で「余俳書の編纂に従事することゝ七年、名づけて俳句分類といふ」と記している。この記述によれば、明治二十二年（一八八九）には甲号に着手していたものと思われる。「俳家全集」は、「俳句分類」のように季題別中心の俳諧作品の分類ではなく、作家別に作品を集めたものであるが、「俳句分類」に並行しての作業であつたと思われる。「二家二十句」は、「俳家全集」の俳人数を増補しつつ、一俳人の作品を二十句に限定したもので、明治二十五年（一八九二）頃着手したものと推定されている（講談社版『子規全集』第二十一巻解題による）。以上のことと、碧梧桐が東京へ居を定めた時期（仙台第二高等中学校を退学、上京し、一時的に子規宅に寄居したのが明治二十七年十二月のこと）とを勘案するに、「こんなものをこしらへて見た」と言つて、子規が「俳句歌留多」を門人たちに示したのは、碧梧桐自身が「丁度明治二十七八年頃のことと、居士はまだ全く病摩の人でなかつた」と記しているように、明治二十七年（一八九四）、ないし明治二十八年（一八九五）頃ということになる（講談社版『子規全集』第二十二巻の「年譜」は、『子規居士真筆俳句歌留多帖』の「序」の引用が不正確なため、明治二十八年一月の項に「俳句歌留多」を作る」と記し

てしまつてゐる。これは間違ひ）。

「序」で、もう一つ大事な点は、碧梧桐の「居士の古人及び古句に対する鑑賞の一端を知る事が出来る」との指摘である。例えば、「二家二十句」の再稿本には五百九十三名の俳人とその作品が収録されている。その中の誰と誰を採録して百人とするのか、そして百人が決まつたとして、どの一句を代表句と定めるのか。そこには、自ずから子規の俳句観が浮彫りにされることになる。

## 二、子規撰の九十七俳人とその作品

そこで、子規撰の九十七俳人と、その作品を列举してみよう。碧梧桐が「序」で「元来百枚揃つてゐたのであるが、今三枚の行方が不明である。之を呈するも蛇足であるから、九十七枚の端数のまゝにして置いた」と記しているように、全九十七枚、九十七俳人である。参考までに、まず、本書の冒頭に掲げられている「凡例」を示しておく。

### 凡例

- 一、この俳句歌留多は子規庵所蔵の珍宝なり。
- 一、固と百枚ありしもの、今九十七枚を存す。失せたる三枚は、恐らく守武、宗鑑、宗因、嵐雪の中なるべし。
- 一、歌留多は之を写真木版に起し、出来得るだけ原

趣致を失はざらんとせり。

この「凡例」も碧梧桐によるものと思われる。そこで  
いよいよ九十七名、九十七句の翻字である。漢字交りの  
変体仮名で墨書されているので、現行の漢字、平仮名に  
改めて翻字し、便宜、通し番号を算用数字で付しておく。  
また、作品には、読み易さを考えて、私に適宜、濁点を  
付した。『子規全集』、未収録。

- 1 藁つんでひろく淋しきかれ野かな
- 2 炬開や汝をよぶは金の事
- 3 時鳥なくや湖水のさゝ濁
- 4 つかむ手のうらをはふたるほたる哉
- 5 夜桜や三味線引いて人通り
- 6 宿直よし幸ひ星の別見ん
- 7 喋々や女の道のあとやさき
- 8 一人にも舟出す頃や川千鳥
- 9 こゝろみに君手をおろせ初かつを
- 10 正行が思ひを鷹の山別れ
- 11 並杉を鳴からすらん蟬の声
- 12 鼻紙の間にしぼむすみれ哉
- 13 あるとないと二本さしけりけしの花
- 14 名月や浅き林の一つ家
- 15 紙衣きて行かるゝ処つれだゝん
- 16 火桶抱いて頤臍をかくしけり

尚白 其角 丈草 涼菟 蓼太 琴風 千代 希因 史登 史邦 咫尺 その 智月 春鴻 嵐外 路通

- 17 一尺の蕨の外や松栢
- 18 両方に髭がある也猫のこひ
- 19 つり逃す魚は手にありほとゝぎす
- 20 清水の上から出たり春の月
- 21 おもしろや理くつはなしに花の雲
- 22 煮凍へともにつきさす女夫哉
- 23 ごぼくゝと湯婆こぼすや石路のもと
- 24 六月や旅人にあふ夜の山
- 25 年わすれ筆にさやしてをさめけり
- 26 とうくゝと瀧の落こむ茂りかな
- 27 木もわらん宿かせ雪の静かさよ
- 28 笠きせて見ばや月夜の鶏頭花
- 29 ほとゝぎす雨のかしらをないてくる
- 30 家ありやゆふ山桜灯のもるゝ
- 31 ゆきくゝて倒れふすとも萩の原
- 32 浮草の花よこいゝ爺が茶屋
- 33 野となりて畠となりて鶉かな
- 34 あら海や佐渡に横ふ天の川
- 35 きかぬやうに人はいふ也時鳥
- 36 衣うつ隠逸伝の女かな
- 37 土佐が画の彩色兀し須磨の秋
- 38 斧の音ふもとの里はゆふ立す
- 39 凍るぞといふ声わびし草鞋の緒

沾徳 来山 淡々 許六 越人 召波 百明 樗堂 馬光 士朗 惟然 支考 浪化 蘭更 曾良 一茶 鳥酔 はせを 鬼貫 完来 素堂 保吉 乙二

40 野やしろに太鼓うちけりくものみね  
 41 牛の子に新場の海鼠ふまるゝな  
 42 初雪や植木車の途中より  
 43 紙屑や出かはり跡のもの淋し  
 44 川風のあやめ吹けり淀の町  
 45 御火焼や鍛冶がつたへし古烏帽子  
 46 湖の水まさりけりさ月雨  
 47 南大門たてこまれてや鹿のこゑ  
 48 花芒小松がうへにそよぎけり  
 49 五六間ゐざりすり行落葉かな  
 50 春雨や蓑の下なるこひ衣  
 51 小男鹿の重りふせる枯野哉  
 52 大名の挑灯多き月見哉  
 53 秩父山くぼい処や花すゝき  
 54 芦鴨の寝るより外はなかるべし  
 55 町うらに夕日のこりてしぐれけり  
 56 冠にもさはらず雛の桃の花  
 57 椿落ち鶏鳴き椿又落る  
 58 塵塚や桜の中の蝶のから  
 59 和らぐや杉の林も日の光  
 60 白毫は梢の上や青嵐  
 61 わやくと鱧送りこむ次場哉  
 62 山茶花も二本は植えぬ宗佐哉

北枝 米仲 旧室 千那 曲翠 桃隣 去来 正秀 蝶夢 梨翁 几董 土芳 也有 成美 巢兆 一具 乙由 梅室 句空 かしく 柳居 葛三 道彦

63 傍に大なる石や女郎花  
 64 やぶ入の履はしげ也魚の店  
 65 元山の力及ばぬ暑哉  
 66 ふじにそふて三月七日八日かな  
 67 生海鼠哉夜が明たやら暮たやら  
 68 襟巻に首引き入れて冬の月  
 69 小家つゞき垣根くゝの黄菊かな  
 70 来ぬ殿を唐黍高し見おろさん  
 71 四方から日のさす雪のあしたかな  
 72 五人扶持取てしたるゝ柳かな  
 73 埋火や親によく似たるうしろつき  
 74 長き夜や起た子を守る忍び声  
 75 永き日や大仏殿の普請声  
 76 ひつばるや空に一つの天の川  
 77 吉田屋の蚊にくはれけり伊左衛門  
 78 隼の尻つまげたる白尾かな  
 79 下京はしぐるゝ筈よ塔一つ  
 80 星合や殿の御入の鈴の音  
 81 市中はものゝ匂ひや夏の月  
 82 足首に清水流るゝ汐干かな  
 83 兵法をつかふて見たき野分哉  
 84 とくゝと心夜に入るそば湯かな  
 85 地車に油をぬるや雲の峰

月居 百里 猿雖 信徳 露川 杉風 牧童 荷兮 素壁 野坡 蓮之 嘯山 李由 乙州 大江丸 蒼虬 水花 凡兆 春来 樗良 升六 吟江

86	朝霜や夜着にちゞみしそれも見ず	如行
87	高麗船のよらで過行かすみ哉	蕪村
88	家遠し海苔干す女何風ふ	移竹
89	絶えずしも薄雲おこるけふの月	暁台
90	恋せずばねこの心のおそろしや	秋色
91	夜寒さぞうら壁つけぬきりぐす	才丸
92	色深し今年よりさく桃の花	青蘿
93	夕立に面もふらず神輿船	諷竹
94	尾をひけば草にとらるゝきゞすかな	言水
95	紫陽花や浅黄にしばし世を化す	巴静
96	さみだれや夜半に貝吹くまさり水	太祇
97	火串ふつてさち矢をそゞぐ小瀧かな	白雄

以上である。順番は『子規居士真筆俳句歌留多帖』の通り。念のため九十七名の作者を列挙しておく。尚白、

其角、丈草、涼菟、蓼太、琴風、千代、希因、吏登、史那、咫尺、その、智月、春鴻、嵐外、路通、沾徳、来山、

淡々、許六、越人、召波、百明、樗堂、馬光、士朗、惟

然、支考、浪化、闌更、曾良、一茶、鳥酔、はせを、鬼

貫、完来、素堂、保吉、乙二、北枝、米仲、旧室、千那、

曲翠、桃隣、去来、正秀、蝶夢、梨翁、几董、土芳、也

有、成美、巢兆、一具、乙由、梅室、句空、かしく、柳

居、葛三、道彦、月居、百里、猿雖、信徳、露川、杉風、

牧童、荷兮、素檠、野坡、蓮之、嘯山、李由、乙州、大江丸、野水、蒼虬、氷花、凡兆、春来、樗良、升六、吟江、如行、蕪村、移竹、暁台、秋色、才丸、青蘿、諷竹、言水、巴静、太祇、白雄の九十七名である。顔触れは、芭蕉をはじめとする蕉門以降、幕末に至るまでの俳人である。先の碧梧桐の「凡例」には、「失せたる三枚は、恐らく守武、宗鑑、宗因、嵐雪の中なるべし」とあつたが、芭蕉以前の俳人を代表させての「守武、宗鑑、宗因」ということであつたのであろう。この推測は、十分に首肯し得る。子規の蔵書目録の中には、明和二年（二七六五）刊、康工編の『俳諧百一集』、嘉永八年（安政二年、一八五五）刊、緑亭川柳編『俳人百家撰』が見えるが、この両書は、「守武、宗鑑、宗因」をも含めて、芭蕉以前の俳人たちにも目配りし、その作品を収録しているからである。が、後に詳述するが、実際には、子規は、あくまでも芭蕉以降の俳人たちにこだわって百人を撰定しようである。

子規は、明治二十六年（一八九三）十一月十九日付の新聞「日本」に発表した「芭蕉雑談」中「悪句」の条に、

芭蕉の文学は、古を模倣せしにあらずして、自ら発明せしなり。貞門檀林の俳諧を改良せりと謂はんよりは寧ろ蕉風の俳諧を創開せりと謂ふの妥当なるを覚ゆるなり。

と記している。この俳諧史観に基づいての撰定だったように思われる。すなわち、子規に至るまでの俳諧の歴史は、「蕉風の俳諧を創開」した芭蕉より始まるとの認識である。となると、当然、「守武、宗鑑、宗因」は、除外されることになるのである。

ところで、右に翻字を試みた「俳句歌留多」、「凡例」には「この俳句歌留多は子規庵の珍宝なり」と見えた。が、実は、現存していたのである。現在は、国立国会図書館蔵。請求タイトルは「子規手製俳句カルタ」、請求記号は、WB4—55。目録には、全九十八枚とある。ここに一つの謎が生じる。今、注目している『子規居士真筆俳句歌留多帖』は、「凡例」に「固と百枚ありしもの、今九十七枚を存す」と見えたように全九十七枚であった。ところが、国立国会図書館蔵の「子規手製俳句カルタ」は、九十八枚。一枚増えている。碧梧桐が推定した「守武、宗鑑、宗因、嵐雪」の中の内ずれか一人の歌留多（カルタ）の札が、その後、出現したということなのであろうか。そこで、国立国会図書館蔵「子規手製俳句カルタ」を披見、『子規居士真筆俳句歌留多帖』と照合してみると、両者は、全く同一のものであることが判明した。それでは、謎の一枚は。それは「守武、宗鑑、宗因、嵐雪」のいずれのものでもなく、土芳の句に、その原因があったのである。

先に見たように『子規居士真筆俳句歌留多帖』に収められている土芳の句は、

51 小男鹿の重りふせる枯野哉 土芳

であった。ところが、国立国会図書館蔵「子規手製俳句カルタ」には、土芳句の札が重複して二枚あったのである。そして、その作品の一是、まさしく右の、

小男鹿の重りふせる枯野哉 土芳

の句。そしてもう一枚の札には、

やうくに寝どこ出来たり年の内 土芳

の句が記されていたのである。これで、国立国会図書館蔵「子規手製俳句カルタ」の九十八枚目の謎は解けたのであるが、それでは、なぜ、土芳句の札が、この二種残されていたのか、というもう一つの謎が残ってしまった。そして、この謎を解決することが、小稿の目指すところでもある。が、このことについては、もう少し後で検討することにする。

### 三、もう一つの「俳句歌留多」

子規には、もう一つの「俳句歌留多」が、活字化されたかたちで残っていたのである。それが見えるのは、明治三十一年（一八九八）十二月十日発行の「ホトトギス」第二巻第三号。「俳諧かるた」と題して発表されている。こちらの方は、全百人百句揃っている。今、それを左に

示すが、子規は、百句を百韻形式の俳諧（連句）に見立てて配列している。子規が、「発句は文学なり、連俳（筆者注・俳諧、連句）は文字に非ず」との衝撃的な発言をしたのは、明治二十六年（一八九三）十二月二十二日発行の新聞「日本」に発表した「芭蕉雑談」中の「或問」においてであつた。が、それ以降も俳諧（連句）文芸への関心、必ずしも少なくなかつたということへの証左となろう。なお、左の作品百句には、通し番号を付し、その後に、先に掲げた「俳句歌留多」の通し番号を（ ）内に示し、対応、参照への便宜を図つた。こちらの方は、すでに講談社版『子規全集』第五卷（俳論、俳話二）に収められている。

- 1 (34) あら海や佐渡に横ふ天の川〇 芭蕉
- 2 (31) 行きくゞて倒れ伏すとも萩の原 曽良
- 3 (69) 小家つゞき垣根くゝの黄菊かな 牧童
- 4 (74) 長き夜や起きた子を守る忍び声 嘯山
- 5 (89) 絶えずしも薄雲おこる今日の月 暁台
- 6 (65) 兀山の力及ばぬ暑さかな 猿雖
- 7 (3) 時鳥啼くや湖水のさゝ濁り 文草
- 8 (43) 紙屑や出代りあとのもの淋し 千那
- 9 (72) 五人扶持取りてしたるゝ柳かな 野坡
- 10 (10) 正行が思ひを鷹の山別れ 史邦
- 11 (37) 土佐が画の彩色兀し須磨の秋 素堂

- 12 (2) 炉開や汝を呼ぶは金の事 其角
- 13 (67) 海鼠かな夜が明けたやら暮れたやら 露川
- 14 (13) 有ると無いと二本さしけり罌粟の花 智月
- 15 (93) 夕立に面もふらず神輿舟 諷竹
- 16 (4) つかむ手の裏を這ふたる蜚かな 涼菟
- 17 (20) 清水の上から出たり春の月 許六
- 18 (17) 一尺の蕨の外や松柏 沾徳
- 19 (84) とくくゝと心夜に入る蕎麦湯かな 升六
- 20 (16) 火桶抱いて頤臍を隠しけり 路通
- 21 (30) 家ありや夕山桜灯の漏るゝ 関更
- 22 (94) 尾を引けば草に取らるゝ雉かな 言水
- 23 (18) 両方に髭があるなり猫の恋 来山
- 24 (6) 宿直よしさいはひ星の別れ見ん 琴風
- 25 (63) かたはらに大いなる石や女郎花 月居
- 26 (49) 五六間いざりすり行く落葉かな 梨翁
- 27 (27) 木もわらん宿かせ雪の静かさよ 惟然
- 28 (75) 永き日や大仏殿の普請声 李由
- 29 (82) 足首に清水流るゝ汐干かな 春来
- 30 (35) 聞かねやうに人はいふなり時鳥 鬼貫
- 31 (85) 地車に油を塗るや雲の峰 吟江
- 32 (38) 斧の音麓の里は夕立す 保吉
- 33 (61) わやくゝと鱈送りこむ次場かな 葛三
- 34 (73) 埋火や親に善く似るうしろつき 蓮之

35	(28)	笠著せて見ばや月夜の鶏頭花	支考	58	(53)	秩父山凹いところや花芒	成美
36	(33)	野となりて畠となりて鶉かな	鳥醉	59	(76)	引つばるや空に一つの天の川	乙州
37	(88)	家遠し海苔干す女何うたふ	移竹	60	(78)	隼の尻つまげたる白尾かな	野水
38	(59)	和らぐや杉の林も日の光	かしく	61	(64)	やぶ入の下駄ほしげなり魚の店	百里
39	(97)	火串ふつて獵矢をそぐ小瀧かな	白雄	62	(60)	白毫は梢の上や青嵐	柳居
40	(77)	吉田屋の蚊に喰はれたり伊左衛門	大江丸	63	(14)	名月や浅き林の一つ家	春鴻
41	(80)	星合や殿のお入の鈴の音	氷花	64	(91)	夜寒さぞ裏壁つきぬきりぐす	才丸
42	(83)	兵法をつかふて見たき野分かな	樗良	65	(41)	牛の子に新場の海鼠踏まるゝな	米仲
43	(48)	花芒小松が上にそよぎけり	蝶夢	66	(45)	御火焼や鍛治がつたえし古烏帽子	桃隣
44	(24)	六月や旅人に逢ふ夜の山	樗堂	67	(62)	山茶花も二本は植ゑぬ宗佐かな	道彦
45	(81)	市中はものゝ匂ひや夏の月	凡兆	68	(44)	川風の菖蒲吹きけり淀の町	曲翠
46	(54)	芦鴨の寝るより外はなかるべし	巢兆	69	(29)	時鳥雨のかしらを啼いて来る	浪化
47	(39)	凍るぞといふ声わびし草鞋の緒	乙二	70	(36)	衣打つ隠逸伝の女かな	完来
48	(12)	鼻紙の間にしほむ董かな	その	71	(70)	来ぬ殿を唐黍高し見おろさん	荷兮
49	(21)	おもしろや理屈はなしに花の雲	越人	72	(90)	恋せずば猫の心のおそろしや	秋色
50	(46)	湖の水まさりけり皐月雨	去来	73	(68)	襟巻に首さし入れて冬の月	杉風
51	(40)	蝙蝠に手もとも暗し油売	北枝	74	(1)	藁積んで広く淋しき枯野かな	尚白
52	(23)	ごぼくと湯婆こぼすや石路のもと	百明	75	(8)	分け入れば石となりけり秋の雲	希因
53	(71)	四方から日のさす雪のあしたかな	素檠	76	(47)	南大門たてこまれてや鹿の声	正秀
54	(7)	耳遠い事でもあるか雉の声	千代	77	(58)	鹿塚や桜の中の蝶のから	句空
55	(50)	春雨や蓑の下なる恋衣	几董	78	(92)	色深し今年よりさく桃の花	青蘿
56	(22)	煮凍へ共に箸さす女夫かな	召波	79	(87)	高麗船のよらで過ぎ行く霞かな○	蕪村
57	(一)	古暦ほしき人には参らせん	嵐雪	80	(9)	こゝろみに君手をそろせ初松魚	吏登

- 81 (11) 並杉を鳴き枯らすらん蟬の声  
 82 (26) とうくと瀧の落こむ茂りかな  
 83 (79) 下京はしぐるゝ筈よ塔一つ△  
 84 (25) 年忘れ筆に鞘して納めけり  
 85 (57) 椿落ち鶏鳴き椿又落つる△  
 86 (66) 富士にそふて三月七日八日かな  
 87 (96) 五月雨や夜半に貝吹くまさり水  
 88 (19) 釣り逃す魚は手にあり時鳥  
 89 (15) 紙衣着て行かるゝ処つれだゝん  
 90 (42) 初雪や植木車の途中より  
 91 (52) 大名の提灯多き月見かな  
 92 (一) おくれ蛇土龍の穴もいかならん  
 93 (32) 浮草の花よ来いゝ爺が茶屋  
 94 (95) 紫陽花や浅黄にしばし世を化す  
 95 (55) 町裏に夕日残りてしぐれけり  
 96 (51) やうくゝに寝処出来ぬ年の中  
 97 (86) 螳螂の夢見て逃げる胡蝶かな  
 98 (一) 山人の急ぎ衣や打つはく  
 99 (5) 夜桜や三味線引いて人通り  
 100 (56) 冠にもさはらず雛の桃の花△
- 以上百句である。この「俳諧かるた」と、先の「俳句歌留多」を重ね合わせることによって、様々なことが解決していく。一つ一つ示していきたい。先の「俳句歌留

- 多」は、すでに見たように明治二十七年（一八九四）、ないし明治二十八年（一八九五）頃の成立と見做し得る。そして、右に見た「俳諧かるた」は、明治三十一年（一八九八）に発表されたものである。そこに三、四年の隔たりがあるわけである
- そこで、両者の関係を確認しておきたい。照合していただけば明らかなように、同一句であっても、漢字、仮名表記等の違いによって、「俳諧かるた」が「俳句歌留多」を座右に置いて、そのまま引き写し、執筆したものでないことは、明らかである。原になつてゐるノートの類（「俳句分類」「俳家全集」「一家二十句」等）は参照されていようが、両者は別種のものでして判断してよいように思われる。その顕著な例を左に示してみる。
- a 煮凍へともにつきさす女夫哉 召波  
 b 煮凍へ共に箸さす女夫かな 召波
- a が「俳句歌留多」（22）、b が「俳諧かるた」（56）である。召波は、蕪村の門人。別号、春泥舎。一句、安永六年（一七七七）刊、維駒編『春泥句集』では、（煮凍にともに箸さす女夫かな）の句形。a の句形は、何によつたか。もつとも「箸さす」を「つきさす」と訓めないこともない。もう一例。
- a 襟巻に首引き入れて冬の月 杉風  
 b 襟巻に首さし入れて冬の月 杉風

これも右の召波の例と同じく、aが「俳句歌留多」(68)、bが「俳諧かるた」(73)である。杉風は、蕉門。元禄四年(一六九一)刊、去来・凡兆編『猿蓑』は、(標巻に首引入れて冬の月)の句形。bの句形で掲出している俳書は不明。子規は何によったか。あるいは、子規の記憶違いによる杜撰か。いずれにしても、この二例によっても「俳諧かるた」が「俳句歌留多」を引き写したものでないことは明らかであろう。両者は、時を隔てての、一応別種のもの、と見るのがよいのではないかと思われる。ただし、子規その人の撰になる百人一句であるので、その大部分において重なっていることは、なんら不思議な事ではない。また、手もとにあった「俳句歌留多」も、当然、参照されてはいよう。

「俳句歌留多」と「俳諧かるた」を重ね合わせることによって、一つ、明らかにし得る事項がある。碧梧桐が「失せたる三枚は、恐らく守武、宗鑑、宗因、嵐雪の中なるべし」と推定した、「俳句歌留多」における「失せたる三枚」である。両者を重ね合わせることによって三枚(三名)が即座に解決する。「俳諧かるた」にあつて、「俳句歌留多」にない三枚(三名)とは、

- 57 古暦ほしき人には参らせん 嵐雪  
92 おくれ蛇土龍の穴もいかならん 長翠  
98 山人の急ぎ衣や打つはく 碩布

の三作品である。嵐雪は蕉門、長翠は白雄(97・39)門の俳人、そして碩布もまた白雄門の俳人である。先に推測したごとく、子規が百人を撰するに当つては、「蕉風の俳諧」の「創開」者としての芭蕉以降(素堂のような年長者も含めての)の俳人に絞つての百人、ということだったと見てよいであろう。嵐雪は、碧梧桐の推定通りであつたが、他の二名は「守武、宗鑑、宗因」の中ではなく、長翠、碩布だったのである。

子規は、「俳諧かるた」を撰するに、その緒言ともいふべき部分において、

こたびにはかの思ひたちといひ、且つ日頃各家の集にことづくに渉るの暇なかりしにぞ、いとおぼつかなくも思ひまどひながら、中には善くも知らぬ人をさへ撰みまじへたる。他日再び改め正さんには少くも十人の変更はあるべし。はた各家の集の中より善き一句抜き出でんはもつとも難きわざなれば固より撰むとはなくて筆に任せて書き抜きたるなり。殊に他に、思ふ所(後を見よ)ありしかばさもあらぬ句さへなきにしもあらず。(傍点筆者)

との謙譲の言を記している。しかし一方では、「昔より俳人百家撰、俳諧百一集、あるは歌俳百人選などいふたぐひの書多かれど、いづれも浅薄にして杜撰を極めたればこを改め正さんの志なきにあらざりし」とも述べてい

るのである。子規の中に、子規独自の百人一句を撰せんとの意欲があったことは、疑うべくもないことと思われる。明治二十七年（一八九四）、ないし明治二十八年（一八九五）に「母堂や令妹の手」によつて作られ、碧梧桐たちが遊んだ「俳句歌留多」が、いわば「襲<sup>け</sup>」の世界のものですれば（現国立国会図書館蔵、それを「晴<sup>はれ</sup>」の世界に持ち出したのが、明治三十一年（一九九八）の「ホトトギス」第二巻第三号に発表した「俳諧かるた」だったのである。

ところで、右の引用部分において私が傍点を付しておいた「他に思ふ所」とは何か。それは、「俳諧かるた」を子規は「百韻の連句」に撰し、「配列」もそれに従つていくということである。すなわち「俳諧かるた」は、芭蕉の〈あら海や佐渡に横ふ天の川〉の発句（もどき）からはじまって、乙由の〈冠にもさはらず雛の桃の花〉の挙句（もどき）で終つていくというわけである。それゆえ、その間の九十八句も、「百韻の連句」の法則に従つて配列しているのであるが、「全く同じくする能はず」ということで、別に「配列」の具体的な法則を箇条書で全十七項のわたつて記している。その総てを引用するのは煩瑣となるので省略するが、その中の重要と思われるもの二項を左に記してみる。

一、同一季は少なくとも二句連続せざるべからず。

又三句より多く連続すべからず。但し最初の五句は同一季を以て連続すべし。

一、同じ切字も二句去なり。

#### 四、同一作者の異句

「俳句歌留多」と「俳諧かるた」の間で、嵐雪、長翠、碩布を除く九十七名の作者そのものの異同はない。ただし、五名の作者において、その作品が異つている。最後に、そのことを問題とし、検討を加えてみることにする。その五名とは、「俳諧かるた」の順に記せば、北枝（51・40）、千代（54・7）、希因（75・8）、土芳（96・51）、如行（97・86）である。北枝、土芳、如行は蕉門。女流俳人千代はいいとして、希因は、はじめ北枝門、後支考門の俳人である。

ということ、検討に入るが、先に問題としたように国立国会図書館蔵の「子規手製俳句カルタ」との絡みもある、まずは土芳句より問題にしてみたい。「子規手製俳句カルタ」には、前にも示しておいたように、土芳の札が、

小男鹿の重りふせる枯野哉

土芳

やうくに寝どこ出来たり年の内

土芳

の二枚残つていたのである。そして、「俳句歌留多」においては、

小男鹿の重りふせる枯野哉  
が、「俳諧かるた」においては、

やうくゝに寝処出来ぬ年の内

が採録されているのである。

土芳

土芳

そこで、まず、両句形に注目してみる。(小男鹿の)の句は、元禄四年(一六九一)刊、去来・凡兆編『猿蓑』所収。巻一の冬の部に「ならにて」の前置を付し、(棹鹿のかさなり臥る枯野かな)の句形で見える。「棹鹿」(小男鹿)は秋の季語(季)であるが、この句の場合は「枯野」で冬の季語(季)となる。一方の(やうくゝに)の句は、元禄十一年(一六九八)刊、沾圃・芭蕉編『続猿蓑』所収。巻之下、冬之部に(漸に寝所出来ぬ年中)の句形で見える。異形句としては、土芳の『蓑虫庵集』に(やうくゝと寝所出来るとしの内)が見えるが、「子規手製俳句カルタ」の(やうくゝに寝どこ出来たり年の内)の句形は、何に拠つたものであろうか。不詳。「俳諧かるた」は、『続猿蓑』の句形に正して採録している。しかして(小男鹿の)も、(やうくゝに)も、両方とも冬の句であるのに、子規は、なぜ(小男鹿の)句を(やうくゝに)句に変更したのであろうか。内容、形式、二つの理由が考えられる。「俳諧かるた」の土芳句の前後を引用してみる。

町裏に夕日残りてしぐれけり

一具

やうくゝに寝処出来ぬ年中

蟬螂の夢見て逃げる胡蝶かな

山人の急ぎ衣や打つはく

夜桜や三味線引いて人通り

となる。私に付した傍線部、破線部は、季語である。一具句に土芳の(小男鹿の)の句を付けることは、まったく問題ない。が、子規にあつて、明治二十九年(一八九六)において、俳句観が大きく飛躍する。その様子は、明治三十年(一八九七)一月一日より三月三十一日まで二十四回にわたつて新聞「日本」に連載した長編評論「明治二十九年の俳諧」(後「明治二十九年の俳句界」と改められた)に窺うことができる。この時点(明治三十年)において子規が注目したのは、人事句。「明治二十九年の俳諧」には、左のごとき記述が見える

俳句は元と簡単なる思想を現すべく、随つて天然を詠ずるに適せるを以て元禄に在りて既に此傾向の甚だしきを見る。明和安永に至り蕪村は別に一機軸を出だし俳句の趣味として天然を取ると共に人事をも取り、しかも其点に成功するを得たり。

このことについて、子規は、明治三十四年(一九〇一)年五月二十五日刊の『春夏秋冬 春之部』(ほとゝぎす発行所)の序(明治三十四年五月十六日付)においても、再度、

土芳

如行

碩布

蓼太

合。

太祇蕪村召波几童等を学びし結果は、啻に新趣味を加へたるのみならず、言ひ廻しに自在を得て複雑なる事物を能く料理するに至り、従ひてこれ迄捨てゝ取らざりし人事を好んで材料と為すの異観を呈せり。これ余が曾つて唱道したる「俳句は天然を詠ずるに適して人事を詠ずるに適せず」といふ議論を事実に打破したるが如し。

と述べているのである。蕪村等、中興期俳人たちから受けた人事句の衝撃がいかに大きかったかを窺知し得るであろう。人事句への関心が大いに昂つていた明治三十一年（一八九八）に撰じたのが「俳諧かるた」だったのである。そんな子規にとつて「小男鹿の重りふせる枯野哉」と（やうく）に寝処出来ぬ年中の）の両句の違いは歴然としていよう。（やうく）の句は、『蓑虫庵集』を繙くと「大どしの夜更る迄客有」と見える。客が帰り、年内に、やつと寝る場所が確保し得たというのである。典型的な「人事」の句。蕪村を経過して元禄を見返ると、元禄にもまた「人事」の句を見出し得た、というわけであろう。そんな作品を発見し得た子規の喜びが、この一句から髣髴としてくる。対する（小男鹿の）の句は、これまた典型的な「天然」（自然）の「写生」句。これによつて（小男鹿の）から（やうく）の変更は、十分に納得し得るように思われる。これが内容面から見た場

今度は、形式面。一具句に（小男鹿の）句を付ける（並べる）ことは、形式的にはまったく問題ないのであるが、その次の如行句（蠅螂の夢見て逃げる胡蝶かな）を想定した場合、問題が生じてしまう。両句を並べてみよう。

小男鹿の重りふせる枯野哉

土芳

蠅螂の夢見て逃げる胡蝶かな

如行

こう並べることによつて明らかのように、切字「かな」（哉）が抵触してしまうのである。このあたり、子規はかなり悩んだものと思われる。なぜならば、もともとの子規撰の如行句（「俳句歌留多」の）は、（朝霜や夜着にちゞみしそれも見ず）。これなら、少なくとも形式上は何の問題もない。——検討は、自ずから、如行句にも及んできた。そこで、如行句二句を並記してみよう。

朝霜や夜着にちゞみしそれも見ず

如行

蠅螂の夢見て逃げる胡蝶かな

如行

子規は、なぜ「俳句歌留多」の（朝霜や）の句を、「俳諧かるた」において（蠅螂の）句に変更したのであるうか。土芳句は、すでに、

やうく）に寝処出来ぬ年中の

土芳

に決定している。冬の句（季語「年の中」）であるので、「三句」までは許されているので、ここで「俳句歌留多」

の如行句（朝霜や）の句を踏襲しても、この限りでは矛盾は生じない。ただし、次の句が、頒布の（山人の急ぎ衣や打つはく）であることは想定し得たわけである。

この句、やや変則的な季語の用い方であるが、「衣打つ」で秋となる。となると、従来の如行句（朝霜や）は「朝霜」で冬であるので、「同一季は少くも二句連続せざるべからず」との子規<sup>みずか</sup>自らが定めた法則と抵触することになる。そこで、この如行句は、どうしても秋季の句でなければならぬことになる。子規は、

蠅螂の夢見て逃げる胡蝶かな

如行

を置いたのである。前の土芳句は、すでに（と言おうか、同時進行的にであろうが）（やうく）に寝処出来ぬ年中）に変更しているので、同一切字が二句続くこともないわけである（同じ切字も二句去なり）。ちなみに、

（朝霜や）の句は、元禄七年（一六九四）刊、其角編

『枯尾華』所収。二十七日廟參之悼句』の中の一句で、

芭蕉追悼句である。（蠅螂の）の句は、元禄十年（一六九

八）刊、李由・許六編『韻塞』所収。二月の項に（蠅螂

の夢見て逃る胡蝶哉）とある。すなわち春（二月）の句である。このことは、内容からいつてももちろんのこと、切字「かな」（哉）によっても確認し得る。が、子規は強引に「蠅螂」ということで秋季の扱いとしているのである。苦肉の策と言おうか、遣り繰りが付かずに、破綻を

来<sup>きた</sup>してしまっているのである。それはともかく、この

（蠅螂の）の句は、『莊子』の「胡蝶の夢」の故事が意識されていよう。そして、蕪村は、このような句作りを得意としたのである。子規は、明治三十年（一八九七）四月十三日より十一月二十九日まで新聞「日本」に「俳人蕪村」を連載しているが（単行本『俳人蕪村』は、明治三十二年十二月一日、ほととぎす発行所刊）、そこでこのような蕪村の傾向、例えば（白梅や墨芳ばしき鴻臚館）のごとき句の傾向を「理想的美」と呼んでいる。物語性濃厚な作品の美である。とにかく蕪村との本格的なかわりが、「百韻の連句」のごとき形式の掣肘もさることながら、同一俳人の作品の差換えに当って、大きな影響を与えているように思われる。この（蠅螂の）句のように形式的には失敗に終わっていても、である。

これで二句終ったので、残りの三句は、掲出の順番に検討していくことにする。まず北枝の、

野やしろに太鼓うちけりくものみね

北枝

蝙蝠に手もとも暗し油売

北枝

の二句である。（野やしろに）が「俳句歌留多」、（蝙蝠に）が「俳諧かるた」の作品である。両句とも、この句形で、天保三年（一八三二）刊、北海編『北枝発句集』所収。「俳諧かるた」における前後の作品を左に記してみる。

湖の水まさりけり皐月雨

蝙蝠に手もとも暗し油壳

ごぼく<sup>と</sup>湯婆<sup>こぼす</sup>や石路<sup>いしぢ</sup>のもと

私に付した傍線部、破線部は、季語である。夏の句二

句から、冬の句へと移っている。それでは、「俳句歌留

多」所収の、

野やしろに太鼓うちけりくものみね

北枝

が、夏の句でありながら、子規は、なぜ「蝙蝠に」の句  
に変更したのであるうか。去來の句に、この句を付ける  
形で並べてみる。

湖の水まさりけり皐月雨

去來

野やしろに太鼓うちけりくものみね

北枝

これで一目瞭然。切字「けり」が両句とも中七文字の  
末尾に置かれているのである。子規は「配列」において  
「同じ切字は二句連続すべからず。但初五に「や」の切  
字ある者と中七に「や」の切字ある者との如きは連続す  
るを得」と断っている。去來、北枝句においても、どち  
らか一方の切字が、通常のように末尾に置かれていたな  
らば、まったく問題はなかったのであるが、たまたま中  
七文字末尾ということで、子規は、差替えを余儀なくさ  
せられたのである。そこで撰の対象となつたのが、〈野  
やしろに〉と同様、夏の句（「蝙蝠」は、夏の季語）であ  
る（「蝙蝠に」であつたというわけである。これで切字の

問題は解決したのである（「蝙蝠に」の切字は「暗し」の

「し」）。そして、内容面から言つても「油壳」を描出し

ている一句には、蕪村の「人事」句に傾倒していた当時

（明治三十一年）の子規の俳句観が如実に反映されてい  
る、その様子を計らずも窺うことができるのである。

次に千代の句。これも、まず「俳句歌留多」の作品と、

「俳諧かるた」の作品を併記してみることにする。

蝶々や女の道のあとやさき

千代

耳遠い事でもあるか雉の声

千代

両句ともに宝暦十四年（一七六四）刊、既白編『千代

尼句集』所収。句形に異同はない。ただし、〈蝶々や〉の

句、〈蝶くやをなごの道の跡や先〉と見え、「女」は

「をなご」と訓むべきであることが判明する。そこで、

差替えの理由である。「俳諧かるた」の前後の作品を見て  
みよう。

四方から日のさす雪のあしたかな

素壁

耳遠い事でもあるか雉の声

千代

春雨や蓑の下なる恋衣

几董

煮凍へ共に箸さす女夫かな

召波

となつている。素壁句が冬（雪）、千代句（雉）、几董句  
（春雨）が春、そして召波句が冬（煮凍）となつている。  
このような配列の中で、千代句の場所に「俳句歌留多」  
の（蝶々や女の道のあとやさき）を置いたらどうなるの

か。同じ春（蝶々）の句であるので、前の素檠句との関係は、まったく問題がない。ただし、百枚百人の作者と、作品が決まっております、その中で「百韻の連句の如く配列」するわけであるから、その範囲で遣り繰りをしなければいけないわけで、後に几董句を置くことを想定すると、

蝶々や女の道のとやさき

千代

春雨や蓑の下なる恋衣

几董

となり、ここでも先の北枝句の場合と同様、上五文字末に置かれている切字「や」が抵触する。差替えざるを得ないのである。そこで、先に見たごとく「耳遠い」の句が置かれたというわけである。この句については、同じ千代の〈隠すべき事もあれ也雉の声〉（『千代尼句集』）が参考になる。「雉」の甲高く、けたたましい鳴声に注目しての擬人化による作品である。擬人化であるゆえ、いやでも「人事」の色合いが濃くなる。ただし、子規は、擬人化に対しては、必ずしも積極的ではなかった。明治三十年（一八九七）十一月三十一日発行の「ほととぎす」第十一号掲載の「試問」の中で「擬人法は物の活動する場合、又は滑稽の意を帯びたる場合には用ゐて成功する事あり。されど沈静なる景色、真面目なる趣向に用うべからず」と述べている。子規は、千代の〈耳遠い〉の句に幾分かの「滑稽」性を見て取ったのであろう。かつ、先に述べたように「人事」に傾斜した内容であることも、

撰入に当って、作用しているように思われる。

最後に希因句である。例によつて「俳句歌留多」と「俳諧かるた」の作品を併記してみる。

一人にも舟出す頃や川千鳥

希因

分け入れば石となりけり秋の雲

希因

「俳句歌留多」の句は、季語「川千鳥」で冬の句となり、「俳諧かるた」の句は、季語「秋の雲」で秋の句となる（一人にも）の句は、明和六年（一七六九）刊、関更編『有の儘』所収。〈分け入れば〉の句は、安永三年（一七七四）刊、蝶夢編『類題発句集』に見出し得る（明和三年刊、後川編『暮柳発句集』にも収録されていると思われるが、未調査）。そこで、子規は、「俳諧かるた」において、なぜ（一人にも）から〈分け入れば〉の句に変更したのか、その理由を考えてみる。「俳諧かるた」における〈分け入れば〉の前後の作品に注目してみたい。

蒿積んで広く淋しき枯野かな

尚白

分け入れば石となりけり秋の雲

希因

南大門たてこまれてや鹿の声

正秀

となつてゐる。前句である尚白句が冬の句であるので（季語は「枯野」、（二人にも）の句を付ける（置く）ことは、まったく問題がない。切字の点でも何等差支えない。が、子規にあつて、その次に正秀句を置くことは想定されていたのであろう。そして、正秀句の次に置く句

が、句空の〈塵塚や桜の中の蝶のから〉の春の作品であることも（花の定座である）。となると、希因句は、正秀句との関係で、どうしても秋の句でなければならぬし、さらに切字の点においても、（一人にも）の句であった場合、正秀句と同じく中七文字末尾の「や」、ということでは抵触するわけである。そこで〈分け入れば〉の句が撰の対象となったということなのである。この例の場合、今までに見てきた四例とは異なり、「人事」の色合いの濃い作品より、「天然」的な作品へと差替えられてはいるが、単なる「写生」句ではない。「秋の雲」が、秋の野に「分け入」ることによつて「石」と化したというのであるから、どこか超現実的である。こんな句に関心を抱くところにも、蕪村の影響を強く受けた明治三十一年（一八九八）の子規の俳句観が反映されているように思われる。

## 五、まとめ

従来、『子規全集』に未収録ということもあり、ほとんど知られていなかった子規の「俳句歌留多」（「子規手製俳句カルタ」）の全貌、および、それに対する碧梧桐の見解（『子規居士真筆俳句歌留多帖』序）を紹介し、それと、広く知られている「俳諧かるた」との関係を明らかにしたのであった。そこにおいては、北枝、千代、希因、土芳、如行の五人の作者の作品に異同がみられた。それは、

「俳諧かるた」が「百韻の連句」の配列に倣った結果生じた形式上の問題を解決せんとしての変更ではあったが、そこにおける作品の撰定には、蕪村への傾倒著しい明治三十一年（一八九八）という時点における子規の俳句観が色々なかたちで反映されている、その様子が顕著に窺えたのであった。

\* 小稿は、平成十七年（二〇〇五）十月九日に松山東雲女子大学で行われた俳文学会第五十七回全国大会における発表「子規の二つの「俳諧かるた」に基づくものである。